



弁護士と野球

会員 高橋 勝徳 (9期)

横浜で生まれて育った私が野球を始めたのは、小学校1年生になった昭和13年(1938年)頃からで、ラジオでは神宮球場の東京六大学野球や後楽園球場の職業野球の中継をしていたし、休日には父に連れられて観に行っていた。

私は巨人ファンではなく、横浜生まれで名二塁手の荻田久徳選手(野球殿堂入り)がいた東京セネターズ(現在の日本ハム)が好きだった。

日本人は本当に野球が好きだと思う。アメリカと戦争をしながら、陸軍の締め付けが強まる中で、敗戦の前年の昭和19年(1944年)の途中まで職業野球の試合を行っていたし、敗戦直後の11月には、東西對抗戦という形で後楽園球場で試合を行った。

昭和21年(1946年)からは職業野球のリーグ戦が始まった。昭和23年(1948年)の夏には、当時、米軍に接収され照明設備があった、横浜の平和球場で巨人対中日の2試合が公式戦として行われた。私は、その試合を観に行ったのだが、その頃の照度は、現在よりも低く、選手は捕球するのに苦労していた。

前置きが長くなってしまったが、私は弁護士登録してからすぐに弁護士の野球チームに入った。その頃は、春と秋に行われる裁判官・検察官・弁護士(東京三弁護士会合同の東京弁護士野球クラブ)の各チームが対戦する法曹野球が主なものだった。

その当時、大阪弁護士野球団と名古屋ローヤーズが毎年試合を行っていることを知り、昭和40年(1965年)に私が大阪地裁に行ったときに大阪弁護士会事務局を訪れ、東西對抗戦の開催を申し入れ、更に名古屋チームを加え、昭和41年(1966年)秋に名古屋の中日球場で東京・大阪・名古屋の3チームによる野球大会が開催された。プロ野球のコミッショナー委員(3人のコミッショナーの合議制)だった中松潤之助弁護士(二弁)がこの年の日弁連会長で、野球大会の開催ではお世話になった。その後、規模を全国に拡大したのが日弁連野球で、昭和56年(1981年)に名古屋

の中日球場で第1回大会を開催し、今年は40回目を迎えることになった。この間参加チームは年々増加し、現在、北海道から沖縄まで33チームに達し、全国52単位会の6割を超える文字どおりの日弁連野球大会になっている。

弁護士の野球というと、私のように、好きなだけで(私は好きだから現在も日弁連野球に携わっている)野球をやっている人間の草野球だと思っておられる方が多いかもしれないが、文武両道に秀で、高校や大学で活躍した人も多い。

矢口洪一元最高裁長官も法曹野球の常連だった。元日弁連会長の本林徹会員(15期)も東京チームの一員だったし、清水幹裕会員(27期)は東大野球部、卒業後は六大学野球や高校野球、社会人野球の審判を長く務めていた。前日弁連会長の菊地裕太郎会員(33期)も、選手・監督として日弁連野球大会の優勝に貢献した。

今年は、第40回の記念大会で、10月8日、9日に名古屋ドームで行われることになっており、既に予選の組み合わせ抽選も終わっているが、新型コロナウイルスの影響でどうなるのか心配である。早く終息してくれることを祈っている(新型コロナの影響で中止になってしまった)。

東京弁護士野球クラブの26回目の優勝と日弁連野球の更なる発展を祈念する次第である。



第12回日弁連野球大会開会式の様子